

教員から学生への 推薦図書

大学図書館にある本から学生のみなさんに読んでほしい一冊を紹介していただきました。
普段あまり本を読まない学生さんと思わぬ良い本の出会いになるかもしれません。



「サバを読む」の「サバ」の正体 NHK気になることば

NHKアナウンス室 編
(新潮社 2014) [新潮文庫]

名図開架 810.4 : N69

吉川 剛
現代中国学部

本書は、日本語の「正しい」用法を示すのではなく、ことばを文化としてとらえる。故に、「話しことば」の観点から、変化やゆれ・乱れについて、それぞれの使われ方に言及する。数の読み方では「十分」、「三階・四階」を、そして「いっかげつ」の表記がある。さらに「衣替え」では、旧暦からの由来を示す。また「明日」や「豚汁」をどのように読むか、「あさっての次の日」はどう表現しているか、また例えば水曜まででないは、いつから「いる」のかなど、かように読んでいて興味深い。

普段から使っていることばについて、いくらかの関心をもつ学生諸君には、本書を一読することを薦める。一時に読み進めるのではなく、トピックス毎に、立ち止まり考え、気づきながら読むことを薦める。



うろんな客

エドワード・ゴリー 著
柴田元幸 訳
(河出書房新社 2000)

豊図開架 726.5 : G67

須川 妙子
短期大学部



世には「胡乱なモノ」が居る。妙な言動で周囲を混乱させるがご本人はどこ吹く風、我道を邁進する。胡乱なモノは珍しい？いや、見回せばここにも、あそこにも。もしや自分も誰かにとっては胡乱なモノ？ある一家に居ついた胡乱な客が仕出かす迷惑行為が、ゴリーの怪しげなタッチで描かれる。困ったモノだが、一家は歓待こそしないが追い出しもしない。なんとなく折り合いをつけて過ごす。世の中とはこんなもの。迷惑かけてかけられて、「仕方がないなあ…。」と許しあう。胡乱な言動を面白がって。(この一家は一方向的に迷惑を被るが、そんなこともあるのだろう…。)

五七調の訳は活弁士の語りのように。「英語がこんな日本語に！」という驚きも楽しい絵本である。



ジェンダーについて 大学生が真剣に考えてみた

あなたがあなたらしくいられるための29問

佐藤文香 監修
一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同 著
(明石書店 2019)

名図開架 367.2 : H77

吉本 篤子
国際コミュニケーション学部

ジェンダーやフェミニズムということばを聞いたことがない人、あるいは、ちょっと知っているけどよくは知らない人、または、もう少し知っているけれど、「女性差別について怒っている怖い人たち」を思い浮かべて敬遠しがちな人に、ぜひおすすめしたい本です。

本書では、ジェンダー研究を学ぶゼミの大学生たちが、イクメン、女性専用車両、セクシャル・マイノリティ、性暴力のテーマなど、よくたずねられる問いと、それに対する回答がまとめられています。

副題にもあるとおり、ジェンダー研究は誰もが自分らしくいることを求めて成り立った学問です。自分がこれからどう働きたいか、どう生活したいかを考えるきっかけとして、学生のみなさんに読んでもらいたいと思います。



ニュルンベルク合流 「ジェノサイド」と「人道に対する罪」の起源

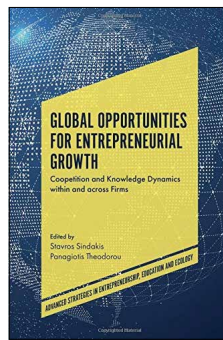
フィリップ・サンズ 著
園部哲 訳
(白水社 2018)

豊図開架 329.67 : Sa62

大川 四郎
法学部



著名な国際法学者である著者は、講演のためにポーランドのリヴィウを訪れる。ここが祖父の出身地であることを知り、自己のルーツ探しを始めた。そして、ナチスによるユダヤ人迫害を逃れて祖父がこの地を脱出したことを知る。祖母もウィーンを脱出したユダヤ人だった。そればかりではない。この地にあったレンベルク大学法学部（レンベルクはリヴィウの旧ドイツ名）に相前後して学んだ国際法学者ハーシュ・ラウターバクト、刑法学者ラファエル・ラムキンは、後年、それぞれ、「人道に対する罪」、「ジェノサイド」という法概念を提唱した。両概念を導入して開廷されたニュルンベルク裁判において、ナチス高官ハンス・フランク（元ポーランド総督）が裁かれ、死刑に処せられた。著者は、フランクの息子ニクラスと共に、リヴィウとニュルンベルクを再訪する。国際人道法史そして現代史の観点からも読み応えのある書である。



Global opportunities for entrepreneurial growth Coopetition and knowledge dynamics within and across firms

Stavros Sindakis, Panagiotis Theodorou 編
(Emerald 2018)

名図リザーブ 335.13 : Si8

大北 健一
経営学部

数年前、着る服のサイズが一回り小さくなり、夏服から買い換え始めないとなくなりました。その頃、タンズから着替えていたバーバリー・ブラックレーベルのTシャツが2枚見つかり、同じようなTシャツを買いに行ったところ、ちょうど時期を同じくして三陽商会がバーバリーのライセンス製品を製造・販売できなくなったということを知りました。

これがきっかけで、両社の企業間関係に関する論文（本研究書の第8章）を書いてみました。こうした国際ブランドライセンスを通じた企業間関係も、サブタイトルにあるコーペティションという競争と協調を同時に扱う考え方で検討できるということを学生のみなさんに知ってもらえたら幸いです。

資本主義と闘った男 宇沢弘文と経済学の世界

佐々木実 著
(講談社 2019)

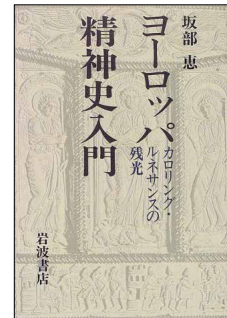
名図開架 289.1 : U99

塚本 恭章
経済学部



Hirofumi Uzawaと宇沢弘文。経済学に従事するものなら誰もがその名を知る世界的経済学者。その生涯と学問的・実践的活動の鮮やかな軌跡をきわめて丹念に描き出そうとする本書は、600頁をこえる大著だが実に読みやすい。学部学生に限らず、院生や専門的研究者にも適した力作だ。本書自体が宇沢をめぐる「20世紀経済学史」にほかならない（なお本書は第6回「城山三郎賞」受賞作である）。

ノーベル賞のアローにその才能を認められ、瞬く間に数理経済学研究の最先端を担い、主流派経済学の発展に大きく貢献。だがその世界的名声が頂点にあるなか日本へ帰国。高度成長の負の遺産（公害や環境破壊、都市問題）に苦悩し、自身の経済学研究に対する批判へと転じた。晩年の「社会的共通資本」の理論や「人間の経済」の復権をめざした宇沢経済学の全体像の解明（その変質を含む）は、「未完の思想」として後世に継がれる。学問としての経済学の根本が深く問われる時代、本書はその糸口を与える最良の一書となる。



ヨーロッパ精神史入門 カロリング・ルネサンスの残光

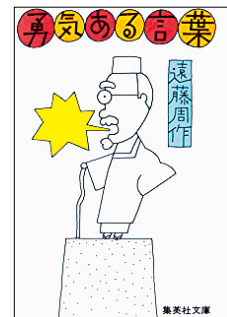
坂部恵 著
(岩波書店 1997)

豊図開架 132 : Sa27
名図開架 132 : Sa27

下野 正俊
文学部



「英文学徒がパークリーを読まず、哲学者がコールリッジを読まないとしたら、それはとても貧しいことです。」恩師がふと漏らした言葉です。専門性を言い訳に、人文学の全体を見渡す見識を失ってはならない、と諭してくれたのです。その師が大学を定年退官する前年、一回だけ開講した講義の記録が、本書です。ここでは、たとえば中世の神秘家と20世紀の詩人エリオット、ボードレールとフツァールが領域の枠を超えて自在に結びつけられ、精神史の壮大な変遷が示されます。それは一人の卓越した読み手の読書経験が何層にも積み込まれた、内的宇宙そのものです。従って、本書は読み手を選びます。しかし、そうした書物と出会い、圧倒されることも、大学生でいる間の特権的で幸福な経験だと思います。



勇氣ある言葉

遠藤周作 著
(集英社 1978) [集英社文庫]

名図開架 914.6 : E59

池亀 尚之
法科大学院

様々なことわざ、格言、流行語等に関するエッセイ集。一つのテーマが文庫2〜3頁の分量で、大変読みやすい。

中でも、「錦の御旗」が秀逸。筆者は、「錦の御旗はあまり好きではない」。それは、「その旗によりかかった人間がどうしても思い上がるからである」という。まさに、正しいと信じる「主義」を錦の御旗にして、「自分の気に入くわぬものをただちに反動と罵り、ただちに時代逆行とつるしあげる時、錦の御旗の弊害が生まれてくる」。「錦の御旗は人間を多くの場合、独善的にする。もしくは偽善的にする。我々は時として錦の御旗によりかかった自分の甘ったれた心理に痛撃を加えねばならぬ」と思う。



日本が売られる

堤未果 著
(幻冬舎 2018) [幻冬舎新書]

豊図開架 304 : Ts94

鄭 智允
地域政策学部

地域政策学部では卒業をするためには卒論研究を書かなければならない。一方、多くの学生は何をどう書けば良いか、毎年苦戦している様子である。どう書けば良いのかはとも

かく、何を書けばいいのかわからないというのは実に困った話だ。そこで、ヒントとして堤未果氏の『日本が売られる』を紹介したい。センセーショナルなタイトルだが、24のテーマについて現在日本が抱えている課題を平坦で分かりやすく述べている。テーマごとの一つ一つは短い分量のため、説明が不十分であったり、疑問を感じる部分もあるだろう。そこで感じた問題を学生自身が調べる課題にすることから研究を進めていけば良い。問題意識の種になるはずだ。